

わなぐら 和名倉百年の森



2002.9.30
会報第4号

発行:百年の森づくりの会 埼玉県さいたま市太田窪2034-1 TEL 048-885-6697 FAX 048-882-0245 e-mail: naitoh@saitama-j.or.jp



三峰より和名倉山を望む(2002年6月8日)

水を育むものは

会長 内藤 勝久

水を育む山への恩返しにと始めた植林活動も5年になります。いろいろな方々から貴重なお話を伺ったり、本を読んだりして知識もかなり増えたように思います。中でも樹が水を蓄えるのではなく、樹が土壌を作り土壌が水を育むこと、そして1cmの土壌を作るのに100年から200年かかること、土壌は岩石の接着剤であり汚物の浄化装置であることなどを知ることができ、今後の活動を進める上で大きな自信となりました。

林を始めたのです。それが百年ほど前のことでした。燃料用の樹木の伐採と煙害ではげ山となったそのあとに植えたカラマツ、スギ、ヒノキも今では大木に成長し、赤茶けた山肌を覆い尽くすまでに、またそれらの木々に誘われて自然植生も始まっていて、百年後のわれわれの活動の姿を実感することができました。

ところで、公害問題は足尾銅山でも同じ頃に発生しましたが、公害対策が遅れ、代議士田中正造が明治天皇に直訴した話は有名です。公害に正面から取り組んだ住友よりも足尾の方が良く知られているというのも歴史の皮肉というものでしょう。

大滝村へ通うようになって、それだけでなくも元気のない林業に追い討ちをかけているものがあることを知りました。鹿、猿、猪などの獣害です。狼という食物連鎖の頂点がいなくなったこと、開発が進んだことも大きな原因ですが、丹精こめて作ったトウモロコシや植えたばかりのスギの苗が無残に食いあらされる様を見るのはやりきれないものがあります。

生命の根源である水。それを育む森林は、山村の人々があつてこそ守られています。水源の森を守る大滝村の人々に感謝し、同時に「水源の森はみんなで守る」という気運を高めていこうではないですか。

目次

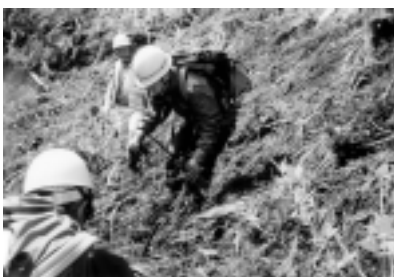
水を育むものは	1
内藤勝久	
荒川源流森づくり体験報告	2
秩父の森の見かた	4
埼玉大学工学部教授 佐々木 寧	
ミスナラどんぐりの育苗	7
市川嘉一	
NPO法人化準備の経過報告	7
野原麗良	
百年の森づくりワーク報告	8
高岡正彦	
大滝村森林	
エコツアーモニター募集のお願い	9
活動報告	10

2002.4.29 「荒川源流森づくり体験」報告



4月29日「緑の日」、さわやかに晴れ上がった空の下、県の広報紙「彩の国」の一般公募で応募された方や会員・スタッフなど100名余が参加し、大滝村大陽寺の山の斜面にブナやヤマザクラなどの広葉樹300本の苗を植林しました。植林は初めてという方も多く、苗を一本一本丁寧に植える姿は、とても真剣で、子供とともに家族ぐるみで参加された方や自然が大好きという高校生、年配のご夫婦など、参加されたどの方も、山仕事に快い汗を流すことができました。自然環境への思いを植林という具体的な活動を通して実現できたことは、大きな成果でした。





植林までの準備(地拵え 4月12日)



植林地(大滝村大血川上流太陽寺域)

樹種	本数
ヤマザクラ	一〇〇本
クリ	五〇本
トチノキ	二〇本
コナラ	六〇本
ミズナラ	五〇本
ブナ	二二本

秩父の森の見かた

(1) 森は山と歴史を語る

埼玉大学工学部教授
佐々木 寧

戦後日本の森

1980年代、日本植生史の編纂のため、日本全国の森を調査してまわる機会を得た。沖縄の西表島、ヤンバルの森から北海道の襟裳岬までである。調査は沖縄を途中にはさみ、九州・屋久島からスタートし、南から順々に進められた。

初期の調査、九州では標高1000m以上の山は全て登ることを目標に、3グループに分かれてかたづけしから踏査していった。折しもこの時代、日本は高度成長期にあり、森では営林署による大掛かりな伐採が急速に行っていた。日本の森を知るのに、自然の森を調査しないことには始まらない。伐採に追われながら調査してまわったという印象が今も強く残っている。当時、九州の脊梁山地にも美しいブナの森が広大に広がっていた。今日訊ねてみても、恐らく美しいブナの森はほとんど存在しないであろう。こうした状況は九州だけにとどまらない。

日本は先進国中、類を見ない森林国といわ

れている。国土の60%以上を森が占めているからである。しかし、その9割以上がスギ、ヒノキの人工林である。残り1割の広葉樹林も、そのまた9割以上が伐採後に再生した二次林である。

戦後の大造林

太平洋戦争後、荒廃した野山へ国策として造林を進めてきたものの、生産活動としての森林の伐採も同時に進められていたのである。造林にしても、日本人の几帳面さがかえって仇となり森を傷めている。獣も通れそうもない急斜面までも植林してきたのである。急傾斜の多い秩父の山々でもこうした光景を見ることができると。また、日本人の几帳面さは、全山スギ、ヒノキということもやっつけてのけている。標高1100m程の九州のある山に登った時、麓から山頂の最後の頂までスギ、ヒノキに覆われ唖然としたものだった。途中の山道でスギ、ヒノキ以外の木は、わずかに2、3本しかなかったと記憶している。四国の脊梁山地の頂に立った時も、四方の山々は緑の海であったが、よく見てみると、全て整然とした造林地であった。今も四国、九州といえば、スギ、ヒノキ材の一大生産地である。

スギ・ヒノキ

建材用の木材には、一般に針葉樹が使われ

る。日本ではスギ、ヒノキ、カラマツ、中国ではやはり杉の仲間のコウヨウザン、馬尾松、米国・カナダではツガ類、欧州ではトウヒ、カラマツ類、アカマツ類である。こうした針葉樹が利用されるのは、主幹が分岐せず、まっすぐな樹形にあること。角材など規格製品を作るのに有効であることなどによる。広葉樹の中でも、熱帯林（例えばラワン材）がもてはやされるのは、幹がずん胴で分岐が少なく、長い丸太状になっているからである。

針葉樹のもう一つの特徴は、材木に樹脂（松脂）分が多く、これが腐敗を遅らせ長持ちさせるのである。寒冷地に多い針葉樹は年輪も混み、硬い材質と樹脂を含むことで良質な建材となるのである。

かくして、戦後日本の山の森は、スギ、ヒノキの造林地へと大きく変質したのである。

スギ、ヒノキの天然林

スギとヒノキは日本の固有種である。我々が今見ているのはほとんど人工造林したものであ



図1. スギの天然林の分布

る。しかし、スギとヒノキの天然林も存在する。現在天然林があるのはごく限られており、いわゆる屋久杉、秋田杉、熊野杉と称されるスギで、人工造林も多いが天然林が存在する場所である。ヒノキでは木曾ヒノキが天然林として有名である。

面白いことにこうした天然林では、スギとヒノキが混在することはほとんどなく、スギの場合は、モミ、ツガと混生（屋久島の例）、ヒノキの場合はサワラとセトトで生育する（木曾）（図2参照）。

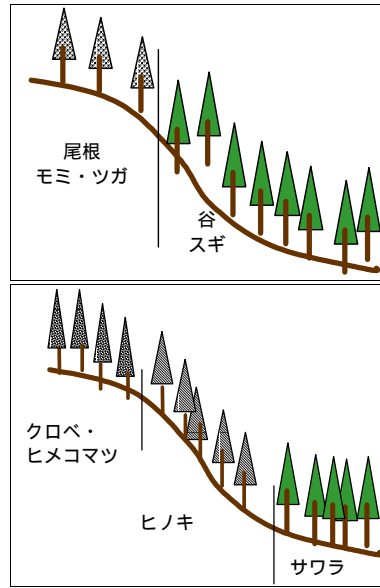


図2. 天然林の植生配分

過去に栄えた遺存植物
スギの天然林の分布を見ると、日本列島の各地に分散していることがわかる（図1参照）。しかし、お互いに連続することはない。また、北アルプスの3000m近い亜高山帯から屋久島の亜熱帯まで分布しており、現在の気候条件とは全く関係していない。唯一共通する条件は、古い地層と雨量が多く、水に恵まれている点である。

なぜこのような分布形態を示すかといえ、スギは、過去の主に第三紀時代に栄えた植物であり、当時は日本のほぼ全体に分布していたとされる。その証拠に、各地から埋没林や埋没木が地中から発見されている。箱根の芦ノ湖の湖底にもスギの森が眠っているのが発見されている。

現在まで生き残ってきたのが図1に示される限られたスギの天然林である。スギはきた化石的存在、遺存植物と称されている。こうした遺存植物は、スギの他にヒノキ、サワラ、コウヤマキ、トガサワラ、チヨウセンゴヨウ、アスナロなどがあり、これらは温帯針葉樹と呼ばれる。亜高山帯に広く分布するシラビソやトウヒなどの亜高山性針葉樹類と区別されるものである。

同じような例が、アメリカのレッドウッド、センペルセコイヤの森である。お隣の中国には日本のスギに非常に似た古代林、柳杉林が天目山にある。ここには他にも金銭松（カラマツ）、イチヨウなどの遺存植物が数多く生育している。

興味深いのは、こうした遺存植物が生育する山塊も、一歩隣の山に入ると全く生育していないことである。

スギ、ヒノキにみる特性

スギとヒノキ、材としての値段でみると、ヒノキはスギの何倍も高価である。その代わり生長が遅く回転が遅いことになる。一方、

スギは生長が早い、その分、材が軟らかく値段は安い。約30〜40年で伐採可能である。スギ、ヒノキを人工造林する場合、一定のマニユアルがある。山仕事する人たちは、スギ、ヒノキのそれぞれの特質に合わせ、尾根部にはヒノキ、谷部にはスギを植えることになる（図3）。

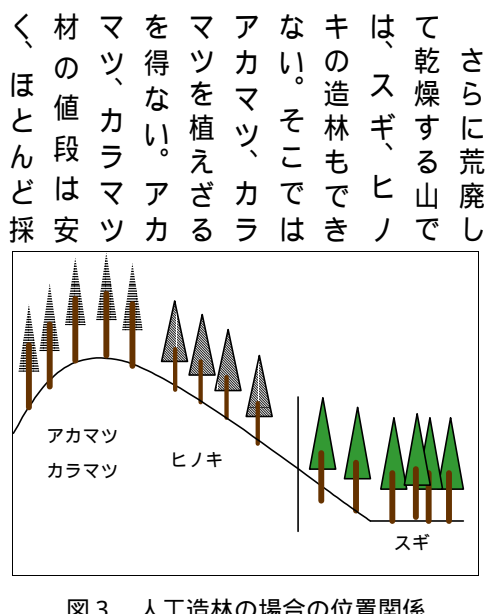


図3. 人工造林の場合の位置関係

さらに荒廃して乾燥する山では、スギ、ヒノキの造林もできない。ここではアカマツ、カラマツを植えざるを得ない。アカマツ、カラマツ材の値段は安く、ほとんど採算に合わないことになる。瀬戸内海地方の雨量の少ない山地（例・六甲山）や活火山の火山灰地（例・浅間山、軽井沢）などがその例である。

森を見て山を判断する

人工造林された針葉樹にそれぞれ特性があることから、今度は逆に、我々が山の森を眺めてみたとき、どの針葉樹が多いのか、あるいはその量的割合で、その山の環境条件を推し測ることができる。以下はその目安である。近くの山で試してみてください。

スギが多い

雨量も多く、水条件に恵まれた山。緩傾斜で土壌条件も良好な山

ヒノキが多い

急傾斜で乾燥しやすい山。岩盤がむき出しになる斜面もある

カラマツが多い

近隣に活火山があり、新しい火山灰やスコレアが堆積している山

アカマツが多い

もっとも痩せた土地の山で、雨量も少なく、乾燥し、岩盤地が多い

今やマツタケの輸出国、韓国や中国。マツタケの育つアカマツ林が多いことを意味し、山としては最悪の山だということになる。

針葉樹の特質

材としては有用な針葉樹も、別の視点から見ると、いくつかの欠点もある。針葉樹は一般に減極性で表面に根を張っている。やせた岩盤地でも生育できるようになっている。

一方、広葉樹は深根性で、地中深く根を張るものが多い(図4参照)。こうした性質は、防災上からみると、斜面保持や風水害に対して広葉樹の方が有利である。その好例は、日本の街路樹には針葉樹が使われることはきわめて少ない。台風時に倒木しやすいからである。日本の野山がスギ、ヒノキの一斉林で覆

われることは、風水害の多い日本ではあまり好ましいことではないのである。大雨の度に繰り返される、土砂崩れのニューズ、その多くはスギ、ヒノキのモノカルチャーとした人災ではないかと私は思っている。

土壌の生成

森の木々は、毎年落葉を供給することで土壌生物を育み、土壌を豊かにしてゆく。しかし、針葉樹の場合、葉には樹脂分が多く分解しづらい。分解後も土壌を酸性に導く。その極端な形が、強酸性土壌のポドソル土壌である。一方、広葉樹は葉の分解も早く、また広葉樹林の場合、構成する樹種も多様であることから、土壌にミネラルを供給、土壌を豊かに、保水性も高めてくれるのである。日本の代表的な森林土壌、褐色森林土壌はブナの森などの広葉樹林で形成される土壌である。スギ、ヒノキのモノカルチャーの森は、ここでも日本の山の地力を下げているのである。

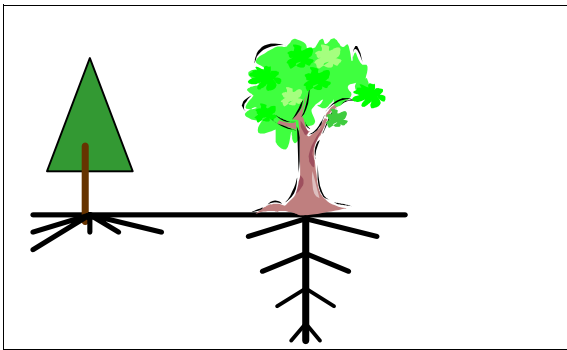


図4. 針葉樹と広葉樹の根茎のちがいを

秩父の森

全国の天然の森を見てきた私から見て、秩父の森、とくに入川渓谷にある森(東大演習林)は第一級品の森である。本物の「日本の自然の森」を理解する上で、貴重な森の一つである。今回はこの秩父の森の特質について語ろう。

ささき やすし

埼玉大学工学部建設工学科・教授。生態系に配慮した環境緑化に関する調査研究を中心に、「河川堤防の植生管理計画の立案」や「河川における生物環境の評価手法の確立とデータベース化」に取り組まれています。荒川河川敷の「サクラソウ自生地」の保全活動についても、学生とともに積極的にかかわっておられます。また、「21世紀の環境デザイン」というアクティブな課題にも、環境先進国といわれるEU、特にドイツでの環境政策の動向を調査し、日本への応用の可能性を探っておられます。

森に接するとき、その森がどのような特徴や由来をもっているのか、また、どのような地質の上に成立しているのかわかりにくいものです。佐々木先生には、植物生態学の専門的な立場から、豊かな森林植生を残す秩父の森の観察のしかた・見かたについて、何回かにわけて、分かりやすく解説していただきます。

ミズナラどんぐりの育苗

植物担当 市川嘉一

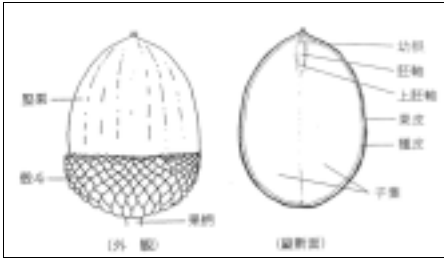
この2年、当会は地元の樹木を用いての植生回復を目指し、東大演習林から供給されたブナの苗を、標高1500～1600mの和名倉山のカラマツ林内の緩傾斜地に植えてきました。今後は作業道付近の緩傾斜地ばかりでなく、仁田小屋尾根南面の急傾斜地にも植林することが予想されます。

その際、ブナよりも乾燥に強いミズナラの苗が必要になってくると思います。寿命約300年のブナ科ブナ属のブナに比べブナ科コナラ属のミズナラは長いものでは2000年もの寿命があり、萌芽力も大きな強い木です。このミズナラもかつては秩父の山に普通に生えていました。

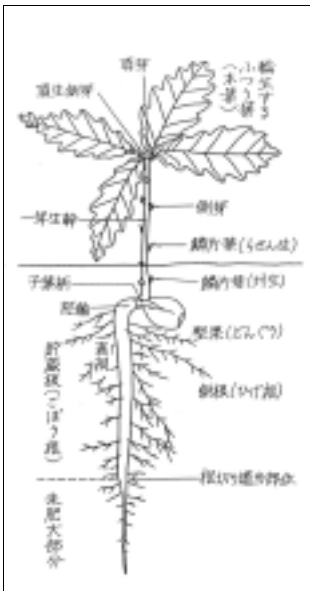
幸い今秋、東大の樹木林でミズナラどんぐりの採集が許可されましたので、当会はミズナラどんぐりの育苗に取り組みることになりました。

育苗方法(案)

1. 深さ30cm位に掘り返した苗床を作っておく。(床作り)
2. どんぐりは乾燥に弱いので、落ちたばかりの新しくなるべく大きなどんぐりを拾う。(採種)
3. 通気の良い袋(ビニール袋は蒸れるので良くない)に入れて持ち帰る。(運搬)
4. どんぐりを水に入れ



ミズナラのどんぐり(堅果)



ミズナラの一年生苗

5. 苗床に3～5cmの深さの穴(深すぎると芽が出ない)を開け、どんぐりを横倒しにして播き土を被せる。(播種) 1m四方に36個位が基準の密度。
6. 苗床の上にワラや落ち葉などを多く載せ、乾燥から防ぐ。(保湿)
7. 3月半ば過ぎ、雨が降って土に湿気が戻ってきたらワラなどを除ける。(芽出し)
8. 芽が出て葉も広がり成長する間は周囲の雑草を取り除く。(除草)
9. 10月の終わり頃掘り起こし、30cm位に伸びた根を上から15～20cmの所で切り、植え直す。(根切り、床替え) 1m四方に9本位の密度で。
10. 除草しながら3、4年して1～1.5mまで育ったら、10月終わりに掘り起こして根回しし、植え直す。(根回し)
11. 春、植林前に掘り起こし、根巻きをして植林地へ運び、植林する。(根巻き、植林)

図と育苗方法の一部は北海道林業改良普及協会「広葉樹育成ガイド・ミズナラ林の育成技術」と斎藤新一郎著「木と動物の森づくり」より引用しました。

NPO法人化準備の経過報告

前回の会報でお伝えしたとおり、現在私達は「百年の森づくりの会」のNPO法人化にむけて準備をしています。この認可を県から受けるためには、様々な資料を作成する必要があります。9月1日、埼玉大学内の「百年の森テラス」で行われた常務理事会では定款の検討が行われました。

定款づくりは、団体の目的や事業内容、将来の展望など、団体の活動と組織の一番大切なことを決めることです。つまり、組織づくりそのものともいえる、NPO法人化の準備において最も大切なことでもあるのです。

今回の常務理事会では、定款作成の書式に従って作成したおおまかな骨組みに、「百年の森づくりの会」の活動理念や将来の展望といった肉付けをしていくために、一項目づつ議論を交わしながら作成していくという作業を行いました。残念ながら、まだ推敲すべき点が多々あり完成には至りませんでした。NPO法人化の実現に向けて少し前進をすることができたように感じました。今後の常務理事会では、今回決める事ができなかった箇所を決定し、より細部まで検討していきたいと思っています。

野原麗良

第十回百年の森づくりワーク報告

期 日 2002年6月7日～9日
参加者 22名

植林担当 高岡正彦

「百年の森づくりワーク」とは、大滝村和名倉山に水を育む広葉樹の森をつくる活動として、1996年より春秋年2回行っている現地作業のことです。

最初の5年間は、スズタケにおおわれた村有道を作業道として復旧する作業を行いました。大変な作業でしたが、2000年秋に村有道を頂上まで切り開くことができました。

その後台風による土砂崩れや路肩の崩落で仁田小屋尾根の作業道に行くための雲取林道そのものが車では入れなくなっていました。二十世紀最初の年に植林をしたいという願いから、2001年6月、ブナの苗や荷物をリヤカーに載せて人力で林道運び、標高1500mの仁田小屋尾根に第一回の植林（ブナ13本）を行いました。そして、そこを「一步の森」と命名しました。

今回の植林にあたり、崩落した林道（鮫沢橋付近）の路肩工事は県によって、林道の落石物の除去は大滝村によって行なわれました。この林道の復旧で、植林活動はとても楽になりました。県、大滝村のバックアップに大変感謝しています。

2002年3月、偵察のために「一步の森」へ行くと、苗の食害を防ぐために張ったネットに大きな雄鹿が角を絡ませて死んでいました。鹿よけ

には効果があったと言っていますが、山に住む動物を死なせてしまったのもこももないので、ネットを撤去することにしました。

その後2回の偵察で、林道終点のゲートから直接尾根に取り付く新しいルートを確認し、第二回植林地の確認のあと、ブナの苗の調達を行いました。

6月7日

先発隊6名で食料買い出し、装備の調達（大滝村より）、テント張りを行い、ワークの準備をしました（ゲート前駐車場でキャンプ テント泊）。

6月8日

早朝、秩父の建築士の野沢さん達と合流。かつて造林作業に使われていた仁田小屋の修復班として新ルートで入山しました。今回のワークは植林作業のほか、老朽化の著しい仁田小屋を修復する作業も行うことになっていました。他のメンバーもゲートに集結、ブナの苗も届き、植林作業班として入山しました。

植林作業班が仁田小屋についたときには仁田小屋修復班は、だいぶ作業が進めていました。ここで早昼食としました。

第一回植林のときブナの苗が左右の木に引っかかり、運びづらかったことから、仁田小屋より、沢沿い上がるルートで登ることにしました。しかし、沢沿いは立木は少ないものの、足場が悪く、急登が続きます。さらに最後まで少し藪があ

ります。犬ブナ平に着いたときは、皆少々へばってしまいました。犬ブナ平から一步の森まで10分、さらに仁田小屋の頭まで10分、さらに第二回植林地まで10分かかります。休み休み歩いて、何とか第二回植林地に着きました。ここでは、一步の森のような広いスペースがないので、陽の光が射し込むところ数カ所のスズタケを坪刈りして植林することにしました。4、4、3、2本に分けて計13本植えることにしました。何とか植えられたのですが、スズタケの根がかなり深く、あまり掘り下げられませんでしたので、根付くか心配です。

帰りに、一步の森を観察しました。昨年植林した13本中5本は葉がついていて、芽を付けているのもありました。1回の植林場所で1本の母樹が育てば最高なことなので、5本が根付いていることは上出来だと思っ

ています。植林作業班が仁田小屋に戻ったときには、仁田小屋修復班によつて小屋の整備はあらか



た終わっていました。修復作業は後日改めてすることにして、今回のワーク作業を終え、下山することにしました。

キャンプに戻り、夜遅くまで、これまでの作業のこと、今回の作業のこと、これからの作業のことを語り合いました。

ところで、今回はお誘いの案内が遅かったため、前回ほどの参加人数ではなかったのですが、新たに中学生が一人参加してくれました。植林活動は人力で地道な作業ですが、その活動は確実に広がっているのがわかります。

その後、仁田小屋修復作業は、7月6～7日に埼玉ワンダーフォーゲル部員など15人で、廃材の整理や基礎づくりのための石並べの作業を行いました。次回のワークでも、作業を予定していません。



大滝村森林エコツアーモニター募集のお願い

秩父多摩国立公園の山々に抱かれた大滝村は、豊かな森と清らかな水に恵まれ、そこに営まれる山峡の人々の暮らしと共に、美しい景観を見せています。しかし、他の山間地域同様に大滝村は、過疎・高齢化という問題をかかえ、地域社会の急激な変化に悩んでいます。地域社会の活性化・再生を目指す視点から、この豊かな自然を利用して新たな産業は、成り立たないものでしょうか。新しい観光の形であるエコツーリズムという考え方に立って、大滝村を見直し、産業として成り立つための必要な基盤（物的・人的・制度的）について考察したいと考えています。このため、試験的なエコツアーを実施し、皆様の貴重なご意見、感想をお寄せいただいて、大滝村でのエコツーリズムの可能性を実証するための基礎資料にしたいと考えています。つきましては、「大滝村森林エコツアーモニター」としてご協力くださいますよう、左記の通り、ご案内申し上げます。

東京大学農学生命科学研究科

森林利用学研究室 貝瀬朋子

記

日 時 10月5日(土)及び10月6日(日)

10時30分 秩父鉄道三峰口駅集合(マイク

口バス等用意)

概要 紅葉の始まった入川渓谷で、川と山と人の関わり方について、地元のガイドから説明を受けながら、森林散策を行います。

実施場所 東京大学演習林内入川渓谷(川又・赤沢出合い付近)。両日とも同じコース

募集人数 5日・6日両日とも10人前後

参加資格 成人で、普通程度の体力のある方

持ち物 昼食・水筒・雨具・筆記用具

その他 ツアー終了後にアンケートに答えていただきます。アンケートでは、入川のエコ資源のポテンシャル、ガイドに求められるものを中心に質問の予定。また、ツアー中はツアー参加者の行動観察を行う者(ガイドとは別)が同行しますので、ご了承ください。



連絡先： 東京大学農学生命科学研究科
森林利用学研究室 貝瀬朋子
〒113-0032 東京都文京区弥生1-1-1
TEL.03-5841-5205 (内線) 25205
FAX.03-5841-7553
E-mail: iseyan@uf.a.u-tokyo.ac.jp

平成14年度上期の活動報告

「荒川源流森づくり体験」開催

4月29日(月)みどりの日に地元大滝村と埼玉県のご協力をいただき、大滝村、大血川太陽寺の杉伐採地の山の斜面に、ブナ・コナラ・ミズナラ・トチノキ・クリ・ヤマザクラの苗木300本を植えました。当日は、会員のほか一般県民を含め87名の参加をえて、無事終了しました。(詳細別掲)

平成14年度第2回通常総会開催

5月19日(日)午後2時から大宮ソニックシティビル4階市民ホールにおいて、第2回通常総会を開催しました。

当日は、80名が参加し、平成13年度事業報告・決算報告、平成14年度事業計画・事業予算を審議し、原案通り承認されました。

総会後、記念講演会を開催し、「農業から環境を考える」をテーマに、埼玉大学 経済学部教授 西山賢一氏にお話いただきました。

講演終了後、懇親会が開催され、それぞれ山への想いを語り合い、和気藹々のうちに終了しました。

第10回百年の森づくりワーク実施

6月7日(金)~9日(日)に和名倉山の第10回百年の森ワークを実施しました。当日は22名の参加をいただき、第2回の植林を実施し、ブナの苗木13本を植樹しました。(詳細別掲)

和名倉山仁田小屋改修工事作業実施

当会では、和名倉山の植林の中継地として利用するため、仁田小屋改修工事をすすめています。

7月6日(土)~7日(日)に、15名の参加をいただき、改修工事の基礎をつくる石運びと小屋の廃材の焼却作業を実施しました。

今後の活動計画について

「荒川源流森づくり体験」大陽寺植林地 および東大演習林「樹木園」観察会開催

日時： 9月29日(日)10:00

秩父鉄道 三峰口駅集合

場所： 大血川大陽寺植林地
東大演習林「樹木園」

参加者： 第1回森づくり体験参加者 約70名

第11回百年の森ワーク実施

開催日： 10月25日(金)~27日(日)

作業： 第3回植林地整備(2003年春植林予定)

仁田小屋改修作業

第1・2回植林地観察、1800m付近偵察

参加ご希望の方は、10月15日(火)までに、下記事務局宛て、電話・FAX・Eメールにてご連絡ください。

参加者には後日詳細をご案内します。

[連絡先]

〒336-0015 さいたま市太田窪2034-1

百年の森づくりの会 会長 内藤 勝久

TEL 048-885-6697

FAX 048-882-0245

E-mail naitoh@saitama-j.or.jp

百年の森交流会in埼玉大学大学祭(むつめ祭)

日時：11月2日(土)13:00~16:00

場所：埼玉大学内 百年の森テラス

〒338-8570 さいたま市大久保255

JR京浜東北線 北浦和駅下車 国際興業バス(埼玉大学行き)20分

JR埼京線 南与野駅下車 国際興業バス(埼玉大学行き)10分

内容：「百年の森づくりの会」活動状況の展示

会員の皆様との交流会

*当日は、簡単な食事・飲み物を用意しますのでお気軽にご参加ください。皆様のご参加をお待ちしております。

新入会員(会員番号 氏名 住所)2002.3.16~9.15入会分

352 ㈱アイネット 横浜市西区 / 353 関口富士江 久喜市 / 354 東京損害保険代理業協会 千代田区 / 355 小林 恒夫 さいたま市 / 356 永嶋 彰 川越市 / 357 安倍弘子 久喜市 / 358 宮川 千賀子 久喜市 / 359 中村藤男 川越市 / 360 東 和枝 さいたま市 / 361 薄井 俊二 さいたま市 / 362 井上一也 さいたま市 / 363 半澤和歌 久喜市 / 364 (財)サイツ環境保全基金 さいたま市 / 365 狩野 一子 横浜市青葉区 / 366 飯星宏徳 岩槻市 / 367 伏見 譲 さいたま市 / 368 平田源一郎 さいたま市 / 369 籠島延隆 さいたま市 / 370 三上 健蔵 さいたま市 / 371 宮澤 忠昭 さいたま市 / 372 高窪 昭雄 さいたま市 / 373 森谷 雄吉 さいたま市 / 374 大熊繁紀 さいたま市 / 375 大竹功一 さいたま市 / 376 佐藤清章 さいたま市 / 377 安田 恒 練馬区 / 378 安井弘之 練馬区 / 379 室久保貞一 深谷市 / 380 児玉徳夫 さいたま市 / 381 山内 一浩 さいたま市 / 382 塚本高志 さいたま市 / 383 クリーンシステム浦和 さいたま市 / 384 サイデン化学㈱ 中央区 / 385 ケントコーポレーション さいたま市 / 386 尾張屋 さいたま市 / 387 平和産業㈱ さいたま市 / 388 FM NACK5 さいたま市 / 389 明石栄嗣 吉川市 / 390 山田和子 久喜市 / 391 大東英祐 練馬区 / 392 藤川喜也 東久留米市 / 393 大倉みゆき 横浜市旭区 / 394 岡田 洋民 深谷市 / 395 中崎章夫 松戸市 / 396 小海一臣 足立区 / 397 田村秀雄 台東区 / 398 市川 馨 台東区 / 399 黒川 薫雄 足立区 / 400 佐藤浩一郎 北区 / 401 矢向敏和 台東区 / 402 坂本和穂 さいたま市 / 403 井坂正巳 葛飾区 / 404 佐藤 格 葛飾区 / 405 寺田輝明 台東区 / 406 加藤 昇 川越市 / 407 鈴木哲夫 川口市 / 408 黒須三恵 白岡町 / 409 藤森賢二 水戸市 / 410 平野祥子 草加市 / 411 野口秀子 越谷市 / 412 藤井良介 皆野町 / 413 千田浩子 八潮市 / 414 平山富美子

会員募集しています。

年会費 個人会員 2,000円*

法人会員 10,000円*

*複数年の納入も可能です。

郵便振替 00140-0-555239 百年の森づくりの会

銀行振込 あさひ銀行 南浦和支店

普通預金口座 No 3835666

百年の森づくりの会 会長 内藤 勝久

お問い合わせ先： 会計担当 東 克明

TEL048-666-7053 E-mail k-azuma@pop16.odn.ne.jp